

S-3

敬語体系の意味論・語用論—琉球与那国語の調査・分析の事例報告

山田真寛

立命館大学衣笠総合研究機構

masahiro.yamada@gmail.com

1 研究のきっかけ

じぶんが上手に話せるようになりたかったから

与那国語を一つの言語体系として記述するため、2010 年から長期滞在型のフィールドワークを始めた。2012 年頃には動詞の語形変化がほぼ解明され、与那国語である程度会話できるようになったが、敬語表現の意味まではわからず、目上の人とは（注意されるので）スムーズに会話できない状態が続いた。

若い人に話すようになってほしいから

調査開始時から、私が話したことがある人ほぼ全員から「若い人（＝50 代くらいまで）は敬語をきちんと使えない」と聞かされてきた。さらに、日常的に与那国語を使用しない人たちはこれを理由に「だからほーげんを話さない」と言い、敬語表現の未習得が地域言語使用の妨げになっていると感じた（重野（2011、広島大学博士論文）も奄美大島で同様の報告をしている）。

調査者×島の人

研究者が調査地の言語を話すことは、さまざまな言語現象に気づきやすくなるほか、多角的なフィールドワークを行う上でも重要だと感じている。また私は文法記述と並行して地域言語の復興・継承研究を行っており、島の人たち、特に若い世代の言語使用促進に貢献する研究を目指している。調査者が研究対象の地域言語を話せるようになること、若い世代の言語使用を妨げる要因をなくすことを目的として、敬語体系の記述・分析を行うことにした。

2 現象の検証に用いたデータセット

敬語表現を、発話者・聞き手・動詞の項の指示対象のうち、二者の社会的上下関係によって分布が制限される言語表現と仮定する。与那国語使用コミュニティにおける社会的上下関係は、ほぼ常に年齢差である。社会的役職（職業、特定の集団の長、芸能の師匠、神事の司など）は、文脈要因としては適切性判断が安定せず、自然談話ではしばしば年齢差が社会的役職を凌駕することが観察されている。また、現代日本語共通語のように、身内とそれ以外を区別することもない¹。本発表では以下の表記を用いる。

- (1) 年齢差 a. $x > y := x$ は y より年長者
 b. $x \leq y := x$ は y より年少者、もしくは x と y は同年齢

¹ ただし *t'u*（文字通りには「人」だが、「お客さん」を表す表現）のように、発話者と疎遠な関係にある人物は、すべての関係において年長者として扱われる傾向がある。

調査デザイン

初期の調査と自然談話（記録の有無に関わらず）から、与那国語の敬語表現には (i) 限られた数の動詞が持つ敬語形式、(ii) 動詞の中止形に後続する二つの補助動詞（非過去直説法形は *warun* と *waran*）、(iii) 動詞の受身・状況可能形と同じ形式（非過去直説法形は *V-arirun*）があることがわかっていった。(iii)は(i),(ii)とは異なる制約によって分布が制限されているため、本発表では扱わない。

上述の発話者・聞き手・動詞の項の指示対象のうちの、二者間の年齢差（社会的上下関係）の組み合わせを「文脈」、動詞普通形もしくは敬語形式を用いた文を「形式」とする。これら二つの独立変項からなる〈文脈, 形式〉の対を刺激として、母語話者の適切性判断を従属変項とした調査をデザインした。エリシテーションによって〈刺激, 適切性判断〉を網羅的に調査し、この結果を与那国語の敬語体系に関する文法知識として記述することにした。

(2) 敬語体系の調査デザイン

刺激 = 〈文脈, 形式〉

文脈 = xRy , $x, y \in \{\text{発話者, 聞き手, 動詞の項の指示対象}\}$, $R \in \{>, \leq\}$

形式 = {動詞普通形, 敬語形式} を含む文

データ = 〈刺激, 適切性判断〉

適切性判断 = {# (不適切), ok (適切)}

例えば、「主格項の指示対象 (NOM) が発話者 (SPK) より年長者」を文脈に、「敬語形式 HON1 (後述) を用いた文」を形式に設定した対からなる刺激の例は(3)のようになる（主格項でも顕在可能な主題項は主格項とするが、文の自然さを考慮して主題項を用いた）。実際のエリシテーションでは、(3)に対して「適切」という適切性判断が得られ、〈〈NOM>SPK, HON1〉, 適切〉というデータが得られた。その他の与那国語敬語体系に関するデータや先行研究は、山田（2016、言語学会 150 回大会予稿集）を参照。

(3) 刺激〈〈NOM>SPK, HON1〉の例、適切性判断：適切

文脈：NOM > SPK (NOM = *asa* の指示対象 (80 代)、SPK = 調査者 (30 代))

形式： *asa=ya* *ma* *i* *uyasy-a-n*.
grandfather=_{TOP} already meal eat.HON1-PERF-IND
“おじいさんはもうごはんを食べた。”

データ：〈〈NOM>SPK, HON1〉, 適切〉

調査の段取り 1. 敬語形式の語彙収集

始めに、重野（2011）の琉球奄美大島語の敬語表現リストを用いて、敬語形式を持つ本動詞を特定した（(4)、上記(ii)）。(4)a'-f'は後述する Hon1、(4)g'-l'は Hon2 に分類することができる。人間を指示対象とする項は、(4)a-f では主格項のみ、(4)g-j は主格項と与格項、(4)k は主格項と対格項、(4)l は主格項と奪格項である。

(4) 普通形			敬語形式			
a.	hu-∅-n	“eat-P _{RES} -I _{ND} ”	a’.	uya-n	“eat.H _{ON1} -I _{ND} ”	
b.	num-u-n	“drink-P _{RES} -I _{ND} ”	b’.	uya-n	“drink.H _{ON1} -I _{ND} ”	
c.	bu-n	“be-I _{ND} ”	c’.	war-u-n	“be.H _{ON1} -P _{RES} -I _{ND} ”	
d.	hir-u-n	“go-P _{RES} -I _{ND} ”	d’.	war-u-n	“go.H _{ON1} -P _{RES} -I _{ND} ”	
e.	ku-n	“come-P _{RES} -I _{ND} ”	e’.	war-u-n	“come.H _{ON1} -P _{RES} -I _{ND} ”	
f.	nn-u-n	“die-P _{RES} -I _{ND} ”	f’.	mair-u-n	“die.H _{ON1} -P _{RES} -I _{ND} ”	HON1
g.	nd-u-n	“say-P _{RES} -I _{ND} ”	g’.	carir-u-n	“say.H _{ON2} -P _{RES} -I _{ND} ”	
h.	t’amir-u-n	“tell-P _{RES} -I _{ND} ”	h’.	carir-u-n	“tell.H _{ON2} -P _{RES} -I _{ND} ”	HON2
i.	tura-∅-n	“give-P _{RES} -I _{ND} ”	i’.	uya-∅-n	“give.H _{ON2} -P _{RES} -I _{ND} ”	
j.	V-i tura-n	“V-M _{ED} give-I _{ND} ”	j’.	V-i uya-∅-n	“V-M _{ED} give.H _{ON2} -I _{ND} ”	HON2
k.	dara-∅-n	“let.go-P _{RES} -I _{ND} ”	k’.	wara-∅-n	“let.go.H _{ON2} -P _{RES} -I _{ND} ”	
l.	tur-u-n	“take-P _{RES} -I _{ND} ”	l’.	tabar-u-n	“take.H _{ON2} -P _{RES} -I _{ND} ”	

調査の段取り 2. 比較的単純な HON1 に分類される敬語形式の調査

(4)a-f は、指示対象が人間である動詞の項は主格項だけであるため、主格項の指示対象・発話者・聞き手のうち二者の年齢差の組み合わせ 6 通りを文脈に設定し、動詞普通形と敬語形式を用いた文 2 通りと組み合わせて刺激を作成した。これにより、形式決定に関与する二者を特定することができる。6 通りの文脈それぞれに 2 通りの動詞形式、合計 12 種類の刺激に対して適切性判断を得た結果を(5)に示す。

(5) HON1 に関する、文脈と形式、適切性判断の結果

文脈	普通形	敬語形式
a. NOM > SPK > LIS	#	ok
b. NOM > LIS > SPK	#	ok
c. LIS > NOM > SPK	#	ok
d. SPK > NOM > LIS	ok	#
e. SPK > LIS > NOM	ok	#
f. LIS > SPK > NOM	ok	#

主格項の指示対象 = NOM、発話者 = SPK、聞き手 = LIS、適切 = ok、不適切 = #

NOM > SPK である文脈では、主格項の指示対象・発話者と、聞き手の年齢差に関わらず、敬語形式を用いた文が適切、動詞普通形を用いた文が不適切になる ((5)a-c)。また SPK > NOM である文脈では、主格項の指示対象・発話者と、聞き手の年齢差に関わらず、敬語形式を用いた文が不適切、動詞普通形を用いた文が適切になる ((5)d-e)。このことから、聞き手の年齢は敬語形式 HON1 の分布に関与せず、主格項の指示対象と発話者の年齢差によって、HON1 の分布が制限されていることがわかった。

さらに、NOM > SPK である文脈では、敬語形式を用いた文が適切、動詞普通形を用いた文が不適切になる ((5)a-c)。また SPK > NOM である文脈では、敬語形式を用いた文が不適切、動詞普通形を用いた文が適切になる ((5)d-e)。以上をまとめると、HON1 の分布は(6)で定義することが可能であり、これが与那国語の敬語体系に関する文法知識の一部であると言える。敬語の補助動詞 *warun* も同様の分布である。

(6) HON1 の分布 : HON1 iff NOM>SPK

主格項の指示対象が発話者より年長者のとき、またそのときに限り、動詞は敬語形式 HON1 である。

調査の段取り 3. 比較的複雑な HON2 に分類される敬語形式の調査

(4)g-l は、指示対象が人間である動詞の項は、主格項のほかにもう一つ存在する。主格項のほかに対格項を取る(4)k、奪格項を取る(4)l 以外は、すべて与格項を取る。人間を指示対象とする項を二つ取る動詞に続く敬語補助動詞 *waran* も、主格項のほかには与格項を取るため、本発表では主格項に次ぐ第二項と与格項に限定して議論する。聞き手の年齢は HON1 の分布に関与しないことから、暫定的に聞き手を排除して、主格項の指示対象、与格項の指示対象、発話者の三者の年齢差の組み合わせ 6 通りを文脈に設定し、動詞普通形と敬語形式を用いた文 2 通りと組み合わせて刺激を作成した。これによって、形式決定に関与する二者を特定することを目的としている。6 通りの文脈それぞれに 2 通りの動詞形式、合計 12 種類の刺激に対して適切性判断を得た結果を(7)にまとめる。

(7) HON2 に関する、文脈と形式、適切性判断の結果

文脈	普通形	敬語形式
a. NOM > DAT > SPK	ok	#
b. NOM > SPK > DAT	ok	#
c. SPK > NOM > DAT	ok	#
d. DAT > NOM > SPK	#	ok
e. DAT > SPK > NOM	#	ok
f. SPK > DAT > NOM	#	ok

主格項の指示対象 = NOM、与格項の指示対象 = DAT、発話者 = SPK、適切 = ok、不適切 = #

NOM > DAT である文脈では、主格項・与格項の指示対象と、発話者の年齢差に関わらず、敬語形式を用いた文が不適切、動詞普通形を用いた文が適切になる ((7)a-c)。また DAT > NOM である文脈では、主格項・与格項の指示対象と、発話者の年齢差に関わらず、敬語形式を用いた文が適切、動詞普通形を用いた文が不適切になる ((7)d-e)。このことから、発話者の年齢は敬語形式 HON2 の分布に関与せず、主格項と与格項の指示対象が形式決定に関与していることがわかった。

さらに、NOM > DAT である文脈では、敬語形式を用いた文が不適切、動詞普通形を用いた文が適切になる ((7)a-c)。また DAT > NOM である文脈では、敬語形式を用いた文が適切、動詞普通形を用いた文が不適切になる ((7)d-e)。以上をまとめると、HON1 の分布は(8)で定義することが可能であり、これが与那国語の敬語体系に関する文法知識の一部であると言える。敬語の補助動詞 *waran* も同様の分布である。

(8) HON2 の分布 : HON2 iff DAT > NOM

与格項の指示対象が発話者より年長者のとき、またそのときに限り、動詞は敬語形式 HON2 である。

HON2 の分布に関与するのが、主格項と与格項の指示対象であることがわかったため、この二者に聞き手を含めた調査デザインを用いてエリシテーションを行ったが、HON1 の分布と同様に、聞き手は関与しないことがわかった。なお(7)f のように、主格項と与格項の指示対象が、どちらも発話者より年少者の場合でも、敬語形式 HON2 を用いた文は適切、動詞普通形を用いた文は不適切である(9)。

(9) 刺激 <SPK>DAT>NOM>, {HON2, plainV}> の例

文脈：NOM > SPK (NOM = **keeta** の指示対象 (20 代前半)、DAT = **yuuu** の指示対象 (20 代後半)、
SPK = 調査者 (30 代))

形式：keeta=ga yuuu=nki nnani {^{ok}c-am-i wara-ta-n, #c-ami-ta-n,}
Keita=N_{OM} Yuuu=D_{AT} kimono {wear-C_{AUS}-M_{ED} H_{ON2}-P_{AST}-I_{ND}, wear-C_{AUS}-P_{AST}-I_{ND}}
“啓太が有羽に着物を着せた。”

3 言語研究における位置づけ

否定証拠を取ることに、最少対を使うこと

文法概説や参照文法を目的とする記述研究では看過されることもあるが、言語理論研究・文法知識の記述研究のためには、否定証拠が必要である。つまり、「どのような形式を用いるか」と同様に、「どのような形式を用いないか」というデータがなければ、すべての可能な表現、そして可能な表現だけを予測する言語理論の構築・文法知識の記述をすることはできない。またその際には、適切性・容認性判断に関わる要因のみが異なる最少対をデータに用いて論証する必要がある。

例えば(10)のデータからは、「主格項の指示対象が発話者より年長者のとき、敬語形式 HON1 を用いる」という記述ができる。

(10) 刺激 <NOM>SPK, HON1> の例、適切性判断：適切

文脈：NOM > SPK (NOM = **asa** の指示対象 (80 代)、SPK = 調査者 (30 代))

形式：asa=ya ma i uyasy-a-n.
grandfather=T_{OP} already meal eat.H_{ON1}-P_{ERF}-I_{ND}
“おじいさんはもうごはんを食べた。”

データ：<<NOM>SPK, HON1>, 適切>

このデータと、本発表で「形式」とした動詞の種類（動詞普通形か敬語形式か）のみが異なる最少対は(11)のデータである。(10)と(11)の刺激は、文脈と動詞以外の語彙に差異が無く、動詞の形式だけが異なり、これらに対する適切性判断は、それぞれ「適切」、「不適切」である。適切性判断は刺激によって決まる変項なので、唯一の差異「形式」が、適切性判断の差異の要因であると結論づけることができる(12)。

(11) 刺激 <NOM>SPK, plainV> の例、適切性判断：不適切

文脈：NOM > SPK (NOM = **asa** の指示対象 (80 代)、SPK = 調査者 (30 代))

形式：asa=ya ma i h-a-n.
grandfather=T_{OP} already meal eat -P_{ERF}-I_{ND}
“おじいさんはもうごはんを食べた。”

データ：<<NOM>SPK, plainV>, 不適切>

(12) <<NOM>SPK, HON1>, 適切> ...データ(10)

<<NOM>SPK, plain V>, 不適切> ...データ(11)

NOM>SPK のとき、HON1→適切 & plainV→不適切

同様に、本発表で「文脈」とした、主格項の指示対象と発話者の年齢差を要因とした最少対は、(10)に対しては(13)、(11)に対しては(14)である。これらのデータから得られる結論(12),(15),(16)によって、「主格項の指示対象が発話者より年長者のとき、またそのときに限り、敬語形式 HON1 を用いる」という完全な文法記述が可能になる。

(13) 刺激 <SPK>NOM, HON1> の例、適切性判断：不適切

文脈：SPK > NOM (NOM = **isitu** の指示対象 (10 代)、SPK = 調査者 (30 代))

形式： isitu=ya ma i uyasy-a-n.

Isitu=T_{OP} already meal eat.HON1 -P_{ERF}-I_{ND}

“イシトウはもうごはんを食べた。”

データ： <<SPK>NOM, HON1>, 不適切>

(14) 刺激 <SPK>NOM, plainV> の例、適切性判断：適切

文脈：SPK > NOM (NOM = **isitu** の指示対象 (10 代)、SPK = 調査者 (30 代))

形式： isitu=ya ma i h-a-n.

Isitu=T_{OP} already meal eat -P_{ERF}-I_{ND}

“イシトウはもうごはんを食べた。”

データ： <<SPK>NOM, plain V>, 適切>

(15) <<NOM>SPK, HON1>, 適切> ...データ(10)

<<SPK>NOM, HON1>, 不適切> ...データ(13)

NOM>SPK のとき、HON1→適切 & SPK>NOM のとき、HON1→不適切

(16) <<NOM>SPK, plainV>, 不適切> ...データ(11)

<<SPK>NOM, plain V>, 適切> ...データ(14)

NOM>SPK のとき、plainV→不適切 & SPK>NOM のとき、plainV→適切

以上の例のように、最少対を用いて、否定証拠とあわせて言語現象を記述することで、個別言語研究がフィールドで収集するデータが、データ提供者となる地域言語コミュニティへ還元する資料、そして一般言語学的研究に利用可能な資料となる。この資料から帰納的に導かれる予測体系が言語理論となり、未知のデータに対する演繹的な予測を持って行うさらなるデータ収集が、理論に基づく仮説の検証プロセスと、新たなデータの発見につながる。一連の帰納と演繹の循環をとおして、個別言語研究も一般言語理論研究も平行的に進めることは、可能であるだけでなく、最適な研究手法である。